# 佐藤春夫の美術愛

# SATO HARUO'S LOVE FOR ART

和歌山県立
近代美術館

The Museum of Modern Art,
Wakayama

謝辞
この度、佐藤春夫ゆかりの作品をご寄贈くださった髙橋百百子様、
本展の開催に際し貴重な作品や資料をご出品くださいました皆様、
また開催にご協力くださった皆様に心よりお礼申し上げます。

佐藤春夫の美術愛
会期：2025年4月12日［土］－6月29日［日］
主催・会場：和歌山県立近代美術館

凡例
- 本パンフレットは、和歌山県立近代美術館で開催する「佐藤春夫の美術愛」展に際して作成した。
- 各作品、資料については、作者名または執筆者名、作品名または資料名、制作年または発行年、技法・材質、寸法、所蔵者の順に情報を記した。
- 作者名の前に「◆」を付したのが、2024年度に寄贈を受けた佐藤春夫の旧蔵作品である。
- ［　］内に記した情報は推定または仮題となる。
- 一部の版画作品に示した寸法のうち、「／」の前後はそれぞれイメージ、シートの寸法である。
- 書簡、葉書などの資料に関しては、技法・材質、寸法は示していない。
- 佐藤春夫の著作の引用に関しては、基本的に『定本 佐藤春夫全集』（臨川書店、1998–2001年）の表記に従っている。読みやすさを考慮して、一部常用漢字、現代仮名づかいに改めている。

［表紙］
◆谷中安規《文豪 佐藤春夫》
制作年不詳　木版、紙
10.7 × 6.8／11.5 × 7.7 cm　当館蔵

［裏表紙］
◆宮下登喜雄《蔵書票：能火野人》
1964年　エッチング、革
9.3 × 6.0 cm（シート）　当館蔵
—
春夫が急逝する1か月前に出された『能火野人十七音詩抄』（大雅洞、1964年）に挿まれた、春夫をモデルとした蔵書票。「能火野人」とは熊野人のこと。本作は革に摺られ、木の土台に貼り付けられている。



## はじめに

2024年度、当館は和歌山県新宮市出身の文学者、佐藤春夫（1892–1964）旧蔵の美術作品の寄贈を受けた。それら春夫ゆかりの作品を紹介するため「佐藤春夫の美術愛」展を開催し、本パンフレットはその内容に基づき構成する。

当館では、前身である和歌山県立美術館時代、1968年10月に「明治100年記念郷土作家回顧展」を開催するのに合わせて、明治時代以降に活躍時期がある物故作家の悉皆的な調査を行っている。4年前に亡くなった佐藤春夫についても洋画家と捉え、展覧会では作品1点を展示している。

1970年に和歌山県立近代美術館として開館したのちにも、1984年に開催した「和歌山の作家と県内洋画壇展〈1912–1945〉」では画家として春夫の作品を紹介。2002年の「西村伊作の世界」展、2006年の「森鷗外と美術」展、2009年の「描かれた紀伊山地の霊場と参詣道」展などでは、新宮の文化と歴史、また美術と文学のつながりを示す際の重要な鍵として、作品や関連資料を通し、その仕事を紹介してきた。

当館のコレクションとの関わりで考えれば、今回の寄贈作品の多くを占める版画は、そのジャンルを活動の柱のひとつに掲げる当館にとって、意義深い作品群である。川上澄生、谷中安規などとの直接の交流を通し、春夫の手元に残された作品は、それぞれの作家、また日本の版画や美術の歴史を物語る際に欠かせないものばかりだ。

ひとつひとつの作品が持つ意味や価値を調べることは、春夫からいまのわたしたちに与えられたありがたい宿題である。故郷への贈り物として託された作品をまずは多くの方にご覧いただくとともに、本パンフレットが、春夫やその作品世界についてはもちろん、春夫と美術との関わりについて、今後さらなる調査、研究を進める一助となれば幸いである。

# 1
## わがふるさとは熊野の首邑新宮

佐藤春夫が生まれ育った新宮は、紀伊半島の南端近く、熊野川の河口に位置する。「わがふるさとは熊野の首邑新宮（シングウと読んで下さい）古来の名邑である」*と春夫が記す町は、熊野三山のひとつ熊野速玉大社の鳥居前町として古い歴史を持ち、熊野の山々で切り出された木材の集積地として、さらに江戸時代には紀伊徳川家の付家老、水野氏が治める城下町としても栄え、豊かな文化を育んできた。

春夫の家系は、江戸時代、現在の那智勝浦町下里に続いた医家であり、「懸泉堂」を掲げ家塾も営んでいた。父豊太郎は和歌山医学校で近代的な医学を修めたのち、医師として新宮に居を定めた。そこで春夫は生まれる。江戸時代の文人趣味を引き継いだ父の影響を受け、また海外で医学を学び豊太郎と同じく新宮で医院を開業した大石誠之助や、その甥の西村伊作が同地にもたらした新しい文化にも触れ、春夫は新宮中学校時代に将来の道を文学と定めるようになる。

同時に、絵画制作を行う伊作が近くにいたことや、1909（明治42）年に与謝野寛、生田長江とともに新宮を訪れた画家の石井柏亭と交流を持ったことなどは、春夫の美術への関心を高めることにつながっている。春夫だけでなく、新宮が多くの文学者、美術家、文化人を輩出してきた背景には、先人が耕した文化的な土壌を大切に思い、継承してきた人びとの存在がある。

＊ 佐藤春夫「新宮」『毎日新聞』（夕刊）、1962年1月12日

**◆富岡鉄斎《丹霞和尚焚仏之図》**
**1893年頃　紙本墨画淡彩、軸装**
**25.3 × 24.8 cm　当館蔵**

—

小野湖山の漢詩、森琴石の《梅渓帰隠図》と同じ表具でひとつの箱に納められている。その箱には「蕙雨山房」と書かれており、春夫の父豊太郎が収集したものと考えられる。蕙雨山房は春夫が育った新宮市登坂の家のことで、父が名付けた。豊太郎が鉄斎と交流をもった様子は春夫の文章からうかがえるが、鉄斎と伝わる作品はもう1点、百合を描いた扇が今回の寄贈作品に含まれている。

**水野華陰《秋色光暉図》**
**制作年不詳　絹本着色、軸装**
**154.0 × 57.0 cm　当館蔵**

—

水野華陰（1850–1887）は、田原藩第11代藩主、三宅康直の四女として生まれ、紀伊藩新宮領第10代で最後の城主、水野忠幹に継々室として嫁した。名は鈔子。幼時、渡辺崋山の妻が守役をつとめ、その弟子椿椿山、子の渡辺小華、また瀧和亭からも絵の指導を受けたと伝わる。さらに洋画家、高橋由一の画塾にも入門している。本作に見られる画技の冴えは、その話を裏切らない。新宮中学校の教員として春夫も教えを受けた小野芳彦の旧蔵と伝わる。

**佐藤春夫［蓬莱山］**
**制作年不詳　紙本着色、軸装**
**123.0 × 30.0 cm　当館蔵**

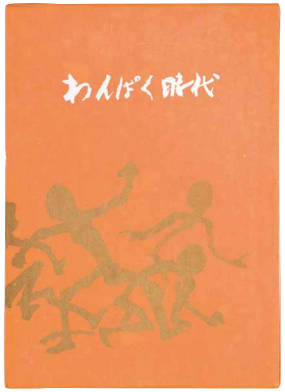
—

新宮には古く神武東征の上陸地、また始皇帝の命により不老不死の仙薬を求めて旅に出た徐福渡来の地との話が伝わる。熊野川河口には、仙薬があるとされた東方海上の三神山のひとつ蓬莱山の名が冠せられた山がある。「蓬莱をめざして早し春の船」という自作の詩と絵で構成された本作も、故郷に伝わる徐福伝説にまつわるものだろう。同時に熊野速玉大社の神事「御船祭」も想起させる。実業家であり、故郷熊野の民俗学研究も行った澤村経夫の旧蔵品。

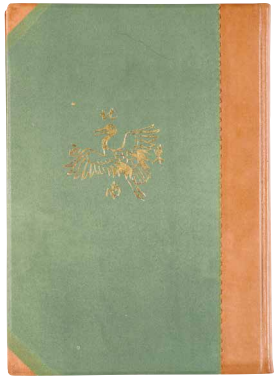
**石井柏亭《滞船》**
**1913年　不透明水彩、紙　52.5 × 73.0 cm　当館蔵**

—

新宮は、熊野川上流で切り出され、川に流して運ばれてきた木材の集積地であった。ここから海を使って出荷されることになるが、河口は浅く、潮流によっては砂が堆積してしばらく木材を運び出せないことがあった。1913年の夏、西村伊作に招かれて新宮に滞在し制作を行った作者が、実際に目にした潮待ちの光景が元になっている。




箱



表紙

**佐藤春夫『わんぱく時代』**
**特装署名本（講談社、1958年）**
**書籍　24.0 × 17.1 cm　個人蔵**

—

「わんぱく時代」は、新宮で過ごした少年、青年時代を回想した自伝的内容で、1957年10月20日から144回にわたって朝日新聞夕刊に連載された。本書はその原稿にいくらか修正を加え、連載時の川端龍子の挿画とともに1冊にまとめた特装本となる。

箱

表紙

**佐藤春夫『我が成長』（新小説社、1935年）**
**書籍　20.0 × 13.8 cm　個人蔵**

—

新宮で過ごした幼少年時代の思い出を取り入れた3つの短編からなる自伝的小説。装幀は青年時代から交流のあった石井柏亭が手がけ、箱、表紙、扉とも新宮の風景が描かれている。巻末の「装幀解説」で春夫は、箱は「新宮市丹鶴城址より東方に蓬莱山頂を越えて熊野川口鵜殿村等を望む景」、表紙は「成川の渡場より前記丹鶴城址を望む景」と記す。

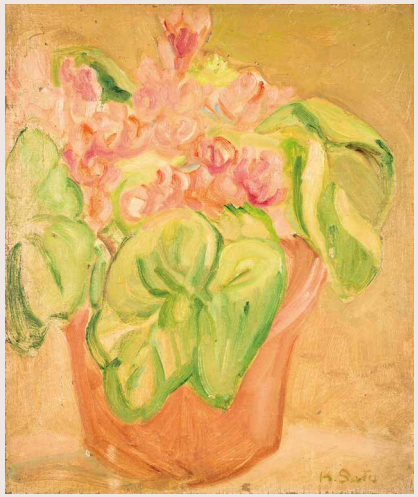
# 2
## 文学と美術と

1910（明治43）年、新宮中学校を卒業した佐藤春夫は、文学への希望を抱き、生田長江を頼って上京する。与謝野寛と晶子夫妻の新詩社では同い年の堀口大學との出会いも生まれ、ともに慶應義塾に入学、永井荷風の指導を受けるようになる。恵まれた環境のなか、雑誌『スバル』や『三田文学』などへ詩や評論の発表を行うが、なかなか評価を得るには至らず、二十歳前後の春夫は、文学への行き詰まりを覚えた苦しい修行時代を過ごしていた。

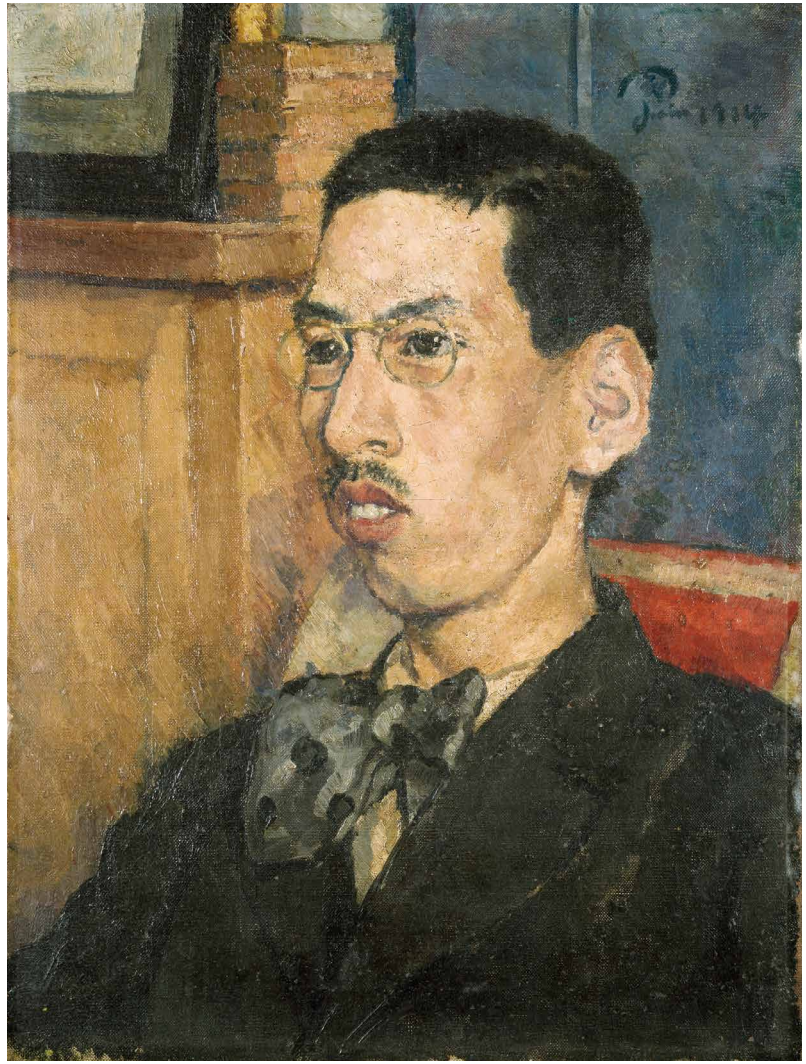
春夫が絵画制作を始めたのはちょうどこの頃、高村光太郎に自身の肖像画制作を依頼したこともきっかけになっている。モデルを務める3週間もの間、留学帰りの才能あふれる芸術家と密接に関わることができたのは得難い経験であった。石井柏亭の勧めもあって絵画制作を始めると、1915（大正4）年の第2回二科展で《自画像（眼鏡のない）》と《静物》が入選、以来3年連続で入選を果たす。

1918（大正7）年、春夫は苦悩する自身の生活から生まれた「田園の憂鬱」で注目を浴び、同年の『病める薔薇（そうび）』によりようやく文壇へのデビューを果たす。以降、春夫は文学者として大きな足跡を残すことになるが、「二十のころの希望は文学と美術との二つに分かれてゐた」*と回想するように、若き日に抱いた美術へのあこがれは、生涯持ち続けることになった。

＊ 佐藤春夫「三人三様の答」『日本経済新聞』、1955年4月



◆佐藤春夫［花］
制作年不詳　油彩、キャンバス
45.8 × 38.2 cm　当館蔵
—
文学者としての評価を高めるなかでも、「僕は十五六からこの方今でも（!）画描きにならうか小説書きにならうかと思って迷ってゐる」*と記すように、春夫にとって絵画制作に打ちこむ時間は特別なものであり続けたようで、油彩を用いた絵画作品が数多く残されている。
＊ 佐藤春夫「美術と文学と自分と」『大調和』1巻9号、春秋社、1927年12月



高村光太郎《佐藤春夫像》
1914年　油彩、キャンバス　61.0 × 45.5 cm　個人蔵
—
雑誌『我等』を創刊した萬造寺齊の紹介により、高村光太郎の作品頒布会に申し込んだ春夫は、自身の肖像画制作を依頼した。春夫は1914年の5月半ばから6月にかけて、3週間あまりそのアトリエに通ってモデルを務め、仕上げられたのが本作である。1作目は光太郎が認めず、2作目としてさらに2週間ほどかけて完成された。髪が短いのは4月に徴兵検査を受けて丸刈りにしたためであるという。

◆高村光太郎《大倉喜八郎の首》
1926年／1956年鋳造　ブロンズ
H: 14.2 × 8.5 × 10.5 cm

—

光太郎の没後、弟の高村豊周が兄の手元に戻っていた原型を元に鋳造し、親しい関係者に贈った作品のひとつ。背面に刻まれた「8」がエディションを指すと考えられる。箱の表書きには豊周の字で「老人の首　高村光太郎遺作」とあるが、作品としては大倉財閥の設立者、大倉喜八郎をモデルにしたものである。蓋裏には、「謹呈　佐藤春夫殿　昭和三十一年十月　高村豊周」との書き込みがある。

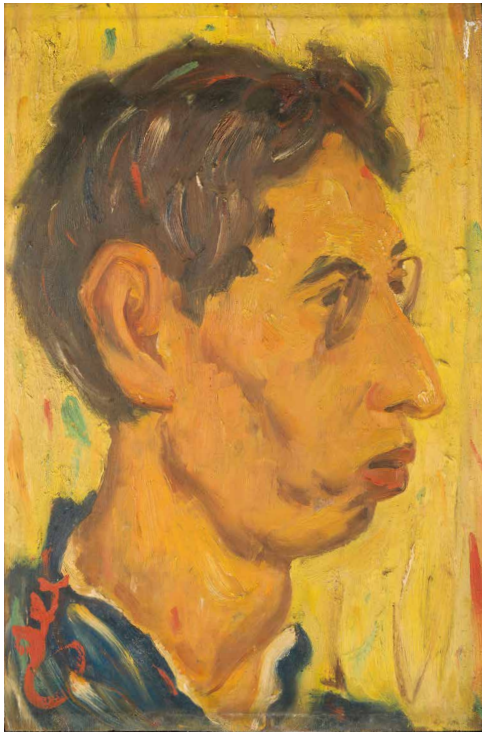
◆作者不詳《蟬　帖鎮》
制作年不詳　木
H: 3.0 × 7.5 × 2.7 cm　当館蔵

—

蓋裏の書き込みを「戦災鉄木」と読むとすれば、戦災により焼けて炭化した木を彫ったことになるか。「香雲」と読める印など手がかりはあるものの、作者、作品の詳細については今後、調査、検討を進めたい。

蓋裏

刻銘



◆里見勝蔵《佐藤春夫像》
1944年頃　油彩、板　45.5 × 30.2 cm
当館蔵

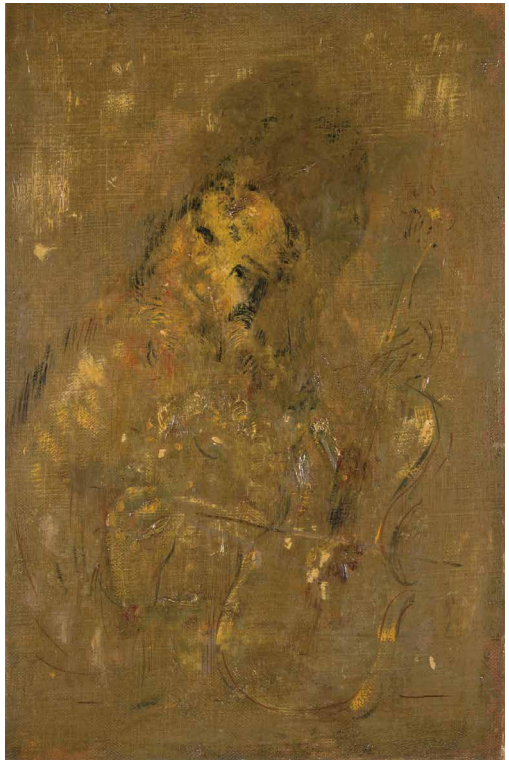
—

佐藤春夫『奉公詩集』（千歳書房、1944年）の巻頭に著者肖像として図版が掲載されている。

◆作者不詳《庭園一隅》
制作年不詳　油彩、キャンバス
41.2 × 32.2 cm　当館蔵

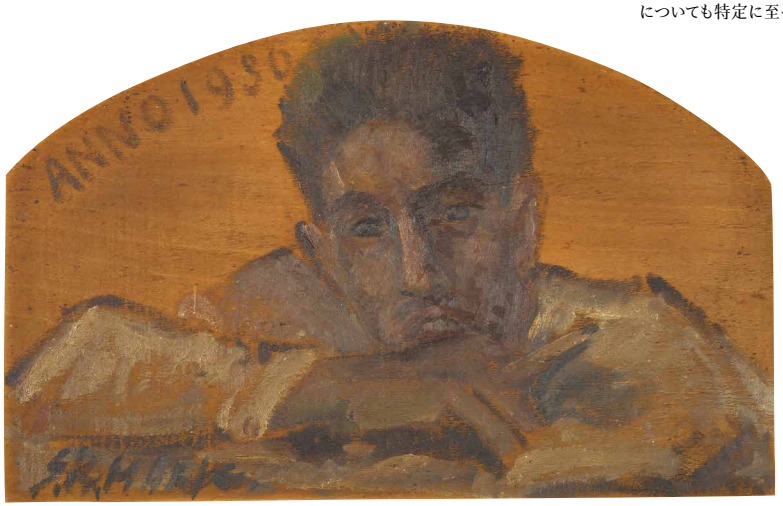
—

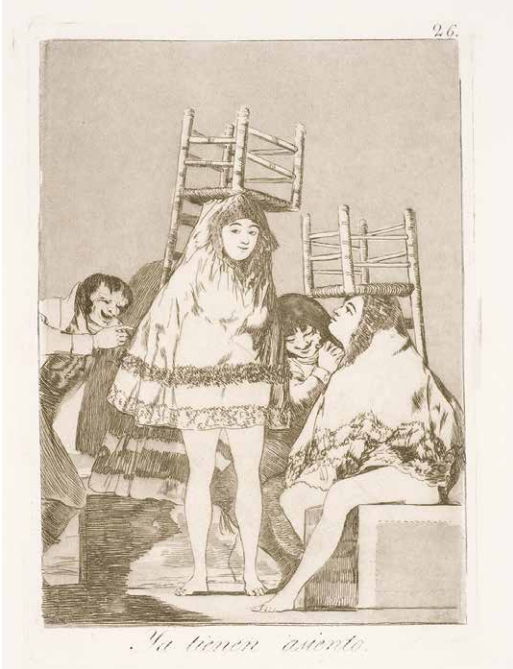
ピンク色の外壁と芭蕉の木など、春夫が1927年に西村伊作の弟大石七分の設計によって建てた東京の邸宅と庭が描かれている。キャンバス裏面に書き込みがあるもののとても淡く、「庭園一隅」は読み取れるが、続く文字が確定できない。



◆伝 オディロン・ルドン［演奏］
制作年不詳　油彩、キャンバス
32.5 × 21.7 cm　当館蔵
—
ルドン作と伝わるが、作者、作品については調査、検討を進めたい。春夫は「油絵では早くからオデロン・ルドンに異常な魅力を感じている」*1と記すほど好みの画家であったらしく、自作でその作品世界を比喩として使うこともあった。木枠に「Exposition D'Art Francais Contemporain au Japon R 02269」と書かれたラベルが貼られていることから、1922年から1931年にかけて10回開催された、「仏蘭西現代美術展覧会」出品作と推定される。同展はフランス人美術商エルマン・デルスニスが集めた美術工芸品を展示販売するもので、多くのフランス絵画も日本に持ち込まれた。春夫の「厭世家の誕生日」*2には「デルスニス氏将来第二回フランス美術展覧会」に出かけた人物が出品作品について語る場面が描かれる。
＊1　佐藤春夫「わが愛する美術」『国立博物館ニュース』91号、東京国立博物館、1954年
＊2　佐藤春夫「厭世家の誕生日」『婦人公論』6巻6号、中央公論社、1923年6月

◆作者不詳［男性像］
1930年　油彩、板　27.1 × 43.8 cm
当館蔵
—
画面左下に書かれたアルファベットの判読が難しく、現在のところ作者また描かれた人物についても特定に至っていない。



26

71

◆フランシスコ・デ・ゴヤ
〈ロス・カプリーチョス〉
刊行年不詳／1799年初版　銅版、紙
当館蔵
—
26：彼女たちはもう席を持っている
21.0 × 15.0 ／ 30.2 × 21.4 cm
—
71：夜が明けたら出かけよう
19.8 × 14.9 ／ 30.2 × 21.4 cm
—
武者小路実篤の回想によると「ゴヤの死後百年の記念展」がアメリカであった時に展示され、のち販売されたセットを、実篤、里見弴、佐藤春夫の3人で共同購入し、くじを引いて中身を分けあったという*。全80点のうち22点が今回の寄贈作品に含まれている。各作品の台紙には「此の画はゴヤ百年祭に紐育図書館に展覧せり」、また本紙には「HODSON Library Collection」のスタンプが押されている。
＊ 武者小路実篤「ゴヤ　エッチング　自画像」『この道』19巻6号、新しき村、1969年6月

# 3
## 佐藤春夫の版画愛

先に紹介したゴヤの〈ロス・カプリーチョス〉を含め、今回当館に寄贈された佐藤春夫旧蔵作品の中心となるのが版画である。1920年代から1930年代にかけて制作された日本の版画家たちによる作品が多く含まれており、なかでも特筆されるのが、川上澄生（かわかみすみお）（1895–1972）と谷中安規（たになかやすのり）の一連の作品である。

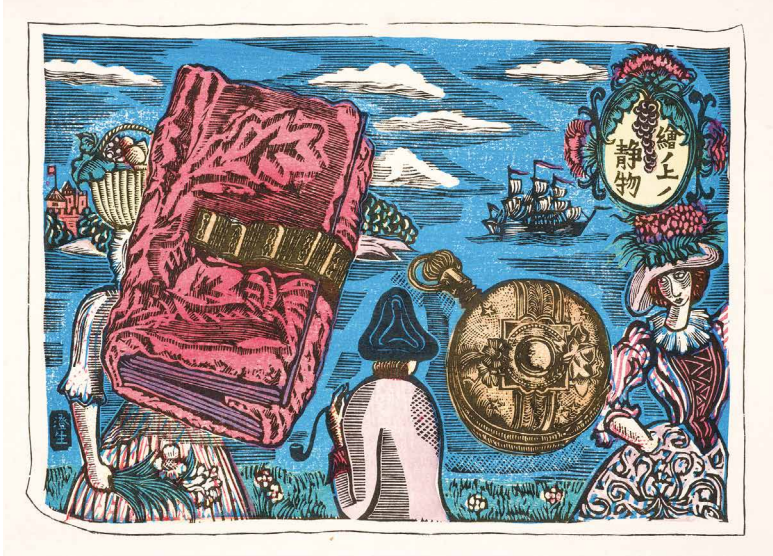
谷中については次に紹介するとして、宇都宮を拠点に活躍した川上に関しては1925（大正14）年から1931（昭和6）年までの主要な作品のいくつかが春夫の手元にあった。これらの作品を春夫に届け、ふたりの仲立ちをしたと考えられるのが、昭和戦前期に数多くの興味深い書籍の出版を手がけた秋朱之介（あきしゅのすけ）（本名：西谷操／1903–1997）＊である。

1930（昭和5）年、五十沢二郎（いざわじろう）により設立された書肆「やぽんな（雅博那）書房」の仕事に協力した秋は、そこで川上の『ゑげれすいろは』の刊行を手がける。同書肆は春夫が責任編集を担った雑誌『古東多万（ことだま）』の発行元でもあった。そこで面識が生まれたのであろう、翌年秋は自ら書肆「以士帖（えすてる）印社」を興すに際し、最初の仕事として春夫の『魔女』の出版を手がけた。同年春夫が秋に送った以下の書簡には、春夫がその挿画を川上に依頼する様子や、秋から贈られた川上の作品に春夫が「狂喜魅了」された様子が記される。

＊ 秋朱之介については、秋朱之介『書物游記』、書肆ひやね、1988年、を参照

拝啓　川上澄生画伯伊曽保第一第二二回分一昨日に着うれしく拝見致し候ところ本日は亦別の三葉着この方はもつと素晴らしいと存じ朝から殆んど狂喜魅了されたるやの感あり平日の陰気な気分貴君の御厚情と画伯の芸術とによつて一掃され珍らしく晴々とした気分になり申し候まま人形芝居の序文今から書き初めるつもり故明日は発送出来ることと存じ升
三葉の中絵の上の静物最も傑出アルハベツトのあるもよろしく貴兄の御選択に服し候　先日御送附の会員募集之書を拝見致して川上氏の創作版画御申込する筈でしたが郵便局など面倒で御申込せずにゐましたところ御恵贈に預り嬉しく存じます　先日の御手紙では的も出来の上は御恵ミ下さるとの事多謝そこで例の魔女に就き一案　魔女は拙詩だけでは少々内容貧弱故川上氏に装幀や挿画などを煩はしそれによつて意義あらしめたいと思ひます（一部抜粋、某点編者）

＊ 佐藤春夫「秋朱之介宛書簡」1931年2月11日付（『定本 佐藤春夫全集』第36巻所収、書簡114）



◆川上澄生《絵ノ上ノ静物》
1926年　木版、紙　22.0 × 30.6 ／ 28.6 × 40.7 cm　当館蔵

◆川上澄生《洋燈とアルファベット読本》
1926年　木版、紙　20.9 × 30.5 ／ 28.7 × 40.5 cm　当館蔵

◆川上澄生《〈伊曽保物語 天〉：にわとりと宝石》
1931年　木版、紙　10.2 × 13.9／13.5 × 17.4 cm　当館蔵
—
◆川上澄生《〈伊曽保物語 天〉：病気の牡鹿》
1931年　木版、紙　9.9 × 13.8／13.8 × 17.4 cm　当館蔵

〈伊曽保物語 天〉は、秋朱之介の以士帖（えすてる）印社からの刊行。イソップ物語からとられた10篇に基づく版画集で、全体では43葉45図が、川上の図案による封筒に案内状とともに未製本のままおさめられていたという。うち4図が今回の寄贈作品に含まれている。元は袋綴じの片面摺りで刊行されたというが、4点ともほぼ同じサイズのシート状になっていた。《絵ノ上ノ静物》《洋燈とアルファベット読本》とも、先に紹介した秋朱之介宛書簡（書簡114）に記された作品に該当する可能性が考えられる。

箱

表紙

挿画：川上澄生

佐藤春夫『魔女』（以士帖印社、1931年）
書籍　24.5 × 18.0 cm　個人蔵

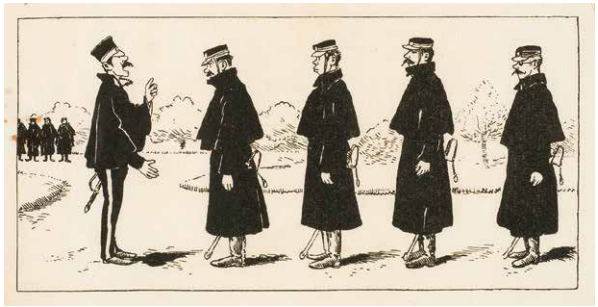
秋朱之介が以士帖印社で手がけた最初の刊行物。装幀は秋が手がけ、表紙に赤いガラス玉を嵌め、合わせ箱に収めた。春夫の希望に沿って、川上澄生が挿画を手がけている。読書家版として1000部刊行が告知されたが、実際には600部。愛蔵家版5部と会員版50部も予告されるが未刊行。特別な2部のみ確認されている。翌年に特装本47部が刊行された。

◆川上澄生《蛇苺》
1927年　木版、空摺り、紙　25.0 × 32.8 cm（シート）　当館蔵
—
◆川上澄生《蛇苺》
1927年　木版、空摺り、紙　24.0 × 34.3 cm（シート）　当館蔵

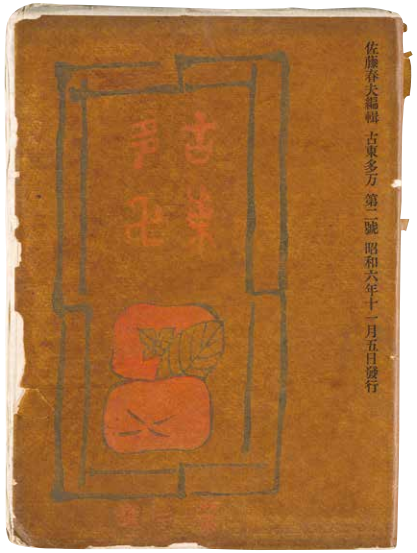
イメージの周囲を空摺りの模様が囲む。今回、右上の虫と左下の「澄」の字が色版で摺られた作品と、空摺りのみで表現された作品と、2点が寄贈された。空摺りのみの作品は窓を切った台紙に貼り付けられている。春夫の「秋朱之介宛書簡」（1931年3月1日付、書簡117）には、「鶏頭と猫児蛇苺の二枚計三枚有難く拝受猫は実に実に傑作也（中略）蛇苺はどうしていけないのかこれも小生には頗る気に入りました」（傍点編者）とある。どちらか、あるいはいずれもがこの時贈られたものに該当する可能性がある。

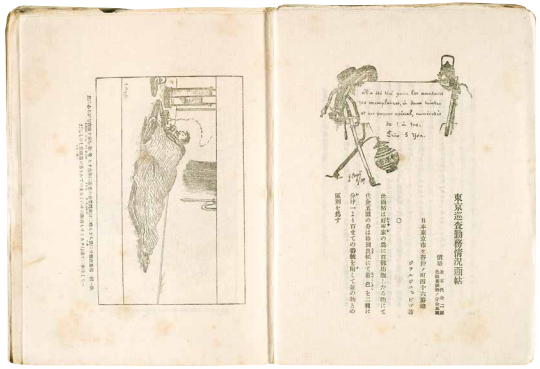
◆川上澄生《〈的〉三部作のうち：当る》
1928年　21.0 × 31.2 ／ 24.0 × 33.5 cm　当館蔵
—
◆川上澄生《〈的〉三部作のうち：狙う》
1928年　22.0 × 31.3 ／ 24.1 × 33.4 cm　当館蔵

三部作のうちの2点。上の《当る》の方には、右下に「澄生」印とともに「秋」印が押される。春夫の「秋朱之介宛書簡」(1931年2月26日付、書簡116) には、「版画的は余り面白くなかった」(傍点編者) と記されているが、これらがその少し前に秋から送付された作品に該当するとも考えられる。



◆ジョルジュ・ビゴー〈警官のたぼう〉
1891年　リトグラフ、紙　当館蔵
—
夜勤のない警官がゆったりと休息を味わう。やはり街中よりもフトンにくるまる方が温かい。
8.9 × 13.0 ／ 12.4 × 17.2 cm
—
ケイブが部下に命令を下す。
7.1 × 14.6 ／ 17.2 × 12.4 cm
—
本来は31図によって構成されるが、今回の寄贈作品にはシートの状態で19点が確認された。紙の長辺の片方が荒く、綴じた状態から外した様子がうかがえる。このシリーズは、春夫編集の雑誌『古東多万』1巻2号、1巻3号、2巻1号 (1931年11月–1932年1月) において、「東京巡査勤務情況画帖」として複製連載が行われている。1931年11月18日付の戸川秋骨宛書簡には、「ビゴオの複製はあれは今二ヶ月ほど誌上で発表 (中略) 版を利用して小生所蔵の原本通りに製本して御清玩に供す」(書簡131) とある。春夫が原本を所蔵していたことは確かなようだが、今回の寄贈作品にはオリジナルにあったと思われるフランス語の詞書がない。詳細については検討を進めたい。




『古東多万』1巻2号 (やぼんな書房、1931年11月)　雑誌　20.5 × 15.8 cm　個人蔵

◆《紅毛人康楽之図》
18世紀後期–19世紀中期　木版、紙
20.6 × 31.2 cm（シート）　当館蔵

◆川西英《少女》
1929年　木版、紙
31.0 × 22.2 ／ 34.0 × 24.1 cm　当館蔵

—

神戸で活躍した版画家、川西英（1894–1965）の作品は、本作以外に各3点組の版画集〈南蛮曲〉の3集と4集が寄贈作品に含まれているが、3集の方はたとうと2点のみ、4集の方はたとうのみが確認される。

◆深澤索一［風景］
制作年不詳　木版、紙
20.0 × 28.2 ／ 22.2 × 30.5 cm
当館蔵

—

深澤索一（1896–1947）は、新潟県に生まれ東京で活動を行った版画家。本作はタイトル、制作年とも未詳だが、類作から制作年はひとまず1925年から1926年頃と推測される。代筆ではあるが、春夫が1936年3月22日付で谷中安規に送った、深澤の住所を訊ねる葉書が残されており、直接の交流も推測される。

◆恩地孝四郎《〈新日本百景〉16：台北東門（台湾）》
1939年　29.5 × 22.4 ／ 32.8 × 24.6 cm　当館蔵

—

〈新日本百景〉は日本版画協会によって1938年から刊行がはじまったシリーズ。日本各地の風景を主にその土地に関わりのある版画家が手がけている。時代状況を反映し、本作のように当時日本の統治下におかれていた外地の風景も含まれるが、戦時体制の進捗から1941年に39図をもって刊行が終了した。今回の寄贈作品には、うち1939年に刊行された10点が含まれている。

◆［平川清蔵］《佐藤春夫蔵書票》
制作年不詳　木版、紙　12.0 × 7.6 cm（シート）　当館蔵

—

画面のドアの部分に「藤」「春」の漢字2文字が刻まれており、佐藤春夫の蔵書票として作られたと考えられる。作者については、画面に刻まれた「H.」「S.」というアルファベットをイニシャルと捉え、また本作の木口木版と考えられる技法を得意とした版画家として、平川清蔵（1896–1964）と推定した。

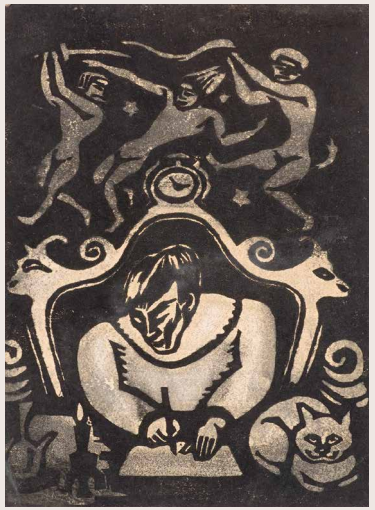
# 4

## 風船画伯とカンシャク先生　谷中安規と佐藤春夫

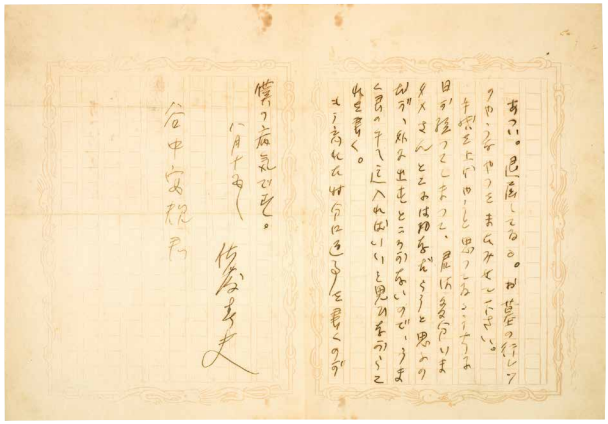
谷中安規（たになかやすのり）（1897–1946）は、大正の終わりから昭和戦前期にかけて、東京で活躍した版画家。ロボットや飛行船なども登場するモダンな都市空間で妖怪や化物が饗宴にふける様子など、谷中が木版画で表した特異な幻想の世界は、見る者の想像力を大いに刺激する。興味のまま自由に行動する様子から、内田百閒（うちだひゃっけん）に「風船画伯」と名付けられたその人と作品とを、春夫は大いに好み、支援を惜しまなかった。

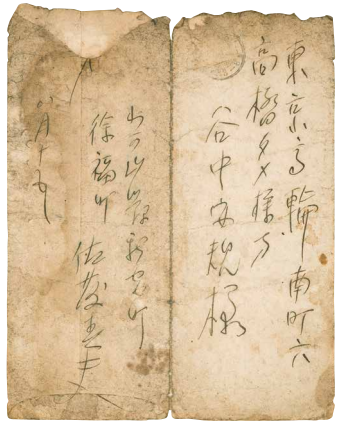
ふたりの出会いは、豪華本の出版を数多く手がけた第一書房の主人、長谷川巳之吉の紹介による。谷中が同書房で住み込み社員として働く間に、日夏耿之介（ひなつこうのすけ）、堀口大學、そして春夫ら文学者と面識を持ったことは、その活躍の場を大きく広げることになった。谷中は、1920年代末から版画の団体展に出品を重ねると同時に、独特の世界観を評価した文学者たちから自著の装幀や挿画のため、多くの作品提供を求められるようになる。春夫の『FOU』、また春夫の紹介を受けた百閒との共作は代表的な仕事で、文と絵、それぞれのイメージが響きあって生まれる特別な世界が、1冊の本のなかで作り上げられている。

1946（昭和21）年、谷中は、空襲で焼け出された後に建てた粗末な小屋で、栄養失調のためひとり亡くなった。その最後まで谷中が大切に守ったのが、春夫ら関わりのあった人びとからの手紙類であった。今回谷中が残した春夫の手紙と、春夫が残した谷中の作品とを一緒に展示する。



◆谷中安規《画想》
1932年頃　木版、紙
15.5 × 11.2 cm（シート）　当館蔵
—
制作にふける谷中自身の姿が表されている。





佐藤春夫「谷中安規宛書簡」
［1925］年8月15日付　個人蔵
—
あつい。退屈してゐる。お墓の行レツのやうなやつをまたみせてください。
手紙を上げやうと思つてゐるうちに日が経つてしまつて、君は多分いまタメさんとこにはゐな（い）だらうと思ふのだが、外に出すところがないので、うまく君の手へ迄入ればいいと思ひながらこれを書く。
もう忘れた時分に返事を書くのが僕の病気です。
八月十五日　佐藤春夫／谷中安規君
—
封筒（消印欠）
（表）東京高輪南町六／高橋タメ様方／谷中安規様
（裏）わか山県新宮町徐福町／佐藤春夫／八月十五日
—
「お墓の行レツのやうなやつ」とは、2014年から2015年にかけて開催された「谷中安規展」（町田市立国際版画美術館、岩手県立美術館）で初めて紹介された、谷中の《お墓の行列笑詩集》（1925年1月作）ではないかと推測される。谷中がいつどのように春夫に作品を見せたのかは分からないが、出会った最初期の交流を示す貴重な書簡である。谷中はこの手紙を亡くなるまで大切に持ち続けた。

◆谷中安規《実験室》
1931年頃　木版、紙　22.0 × 15.9 cm（シート）　当館蔵

◆谷中安規《花鳥》1933年　木版、紙
16.1 × 17.6 cm（シート）　当館蔵
—
◆谷中安規《鍵》1933年　木版、紙
17.1 × 23.0 cm（シート）　当館蔵
—
版画の同人誌『白と黒』41号（1933年11月1日発行）は、谷中の個人作品集となっており、表紙、裏表紙、中に10点の作品が貼り込まれている。今回の寄贈作品には、《花鳥》や《鍵》などその所収版画のうち7点が含まれているが、いずれも独立したシート形状であった。谷中は、『白と黒』および『版芸術』の刊行を手がける料治熊太の元にしばしば通ってその編集を手伝っており、両誌には谷中の作品も数多く収載されている。同人たちの発表の場である誌面が異例の個人作品集となったのは、谷中が発行前月にしばらく無人となる料治宅の留守とともに、次号の発行準備を任されたためであった。谷中は発行部数60部に掲載する12点の作品、合計720枚を、留守番する数週間のうちにひとりで摺り上げてしまったことになる。ただし、料治家族が帰宅してみると自宅はひどい状態であったという。

表紙

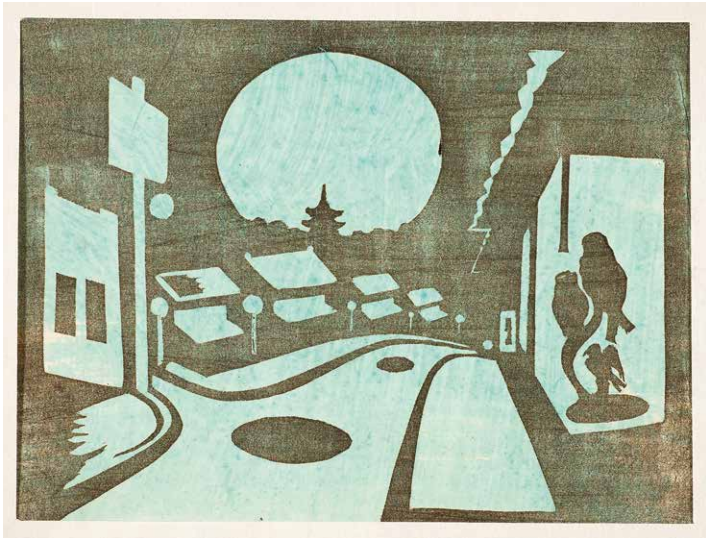
僕

旅

◆谷中安規『方寸版画』創刊号
幻想集（創作版画倶楽部、1933年2月8日）
書籍　21.3 × 20.0 cm　当館蔵
僕　木版、紙　9.7 × 9.7 cm（シート）
旅　木版、紙　9.0 × 9.5 cm（シート）
—
中島重太郎主宰の「創作版画倶楽部」から刊行された版画集で、谷中の作品10点が収められている。緒言では500部発行とされるも、実際の発行部数は分からない。「方寸」の名の通り三寸四方の小さな画面であるが、そのなかにははるかに想像が広がる幻想的な世界が描き出されている。

◆谷中安規《〈街の本〉：ムーラン・ルージュ》
1935年　木版、紙　19.3 × 24.2 cm（シート）　当館蔵
—
◆谷中安規《〈街の本〉：動坂》
1935年　木版、紙　18.9 × 25.2 cm（シート）　当館蔵

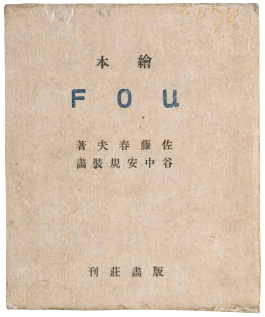
〈街の本〉は、「渋谷」「シネマ」「動坂」「ムーラン・ルージュ」の4点で構成される版画集。1933年の第8回国画会展に「街の本」の出品歴があり、初出は同年と考えられる。春夫旧蔵の作品にはたとうが付属しており、そこに「昭和十年春　安規生」と摺られたラベルが貼り付けられている。ほかにも同じたとう入りのセットが確認されており、1935年に複数セットが作られた可能性も推測される。



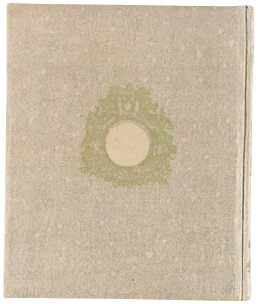
## 『FOU』をめぐって

おそらく1935年、谷中から著作に絵を寄せたいと求められた春夫は、1926年1月に発表していた小説「FOU」(フランス語で狂人の意)を選んで原稿を渡した。谷中の制作は遅れに遅れたようで、右に示す谷中宛の葉書は、差出人に「カンシャク先生」と記されるなど、その際の春夫の苛立ちを表しているとも推測される。春夫が「谷中は僕のカンナ屑を化して花びらにし、僕の小石を拾ってパンにした」と記した「絵本FOUはしがき」は、1935年10月に書かれた。春夫は装画の全体像が見えないなかでこの文章を書いたのであろうか。『FOU』の印刷日は1936年4月16日、発行日は同年4月20日。3月20日を最終の締切日と設定したのであろうが、2月半ばの時点でまだ作品は届いていなかったのだろう。この間、谷中の方はうまく金銭も受け取りながら、飄々と納得いく作品を作り続けていただけであることも想像されるが、結果として絵と文とが響き合う、心踊る1冊の作品に仕上がった。

佐藤春夫『FOU』(版画荘、1936年)　書籍　15.0 × 24.5 cm　当館蔵

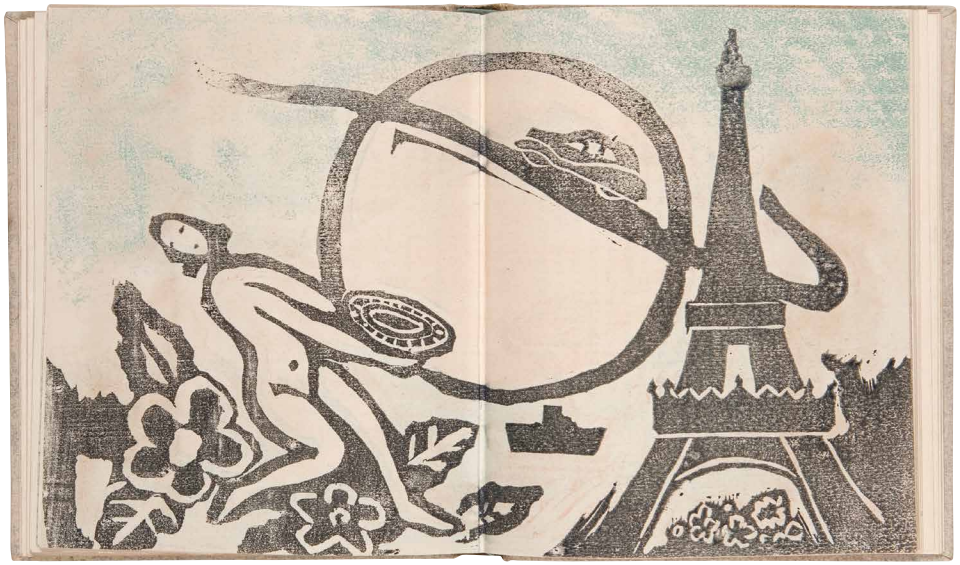



箱

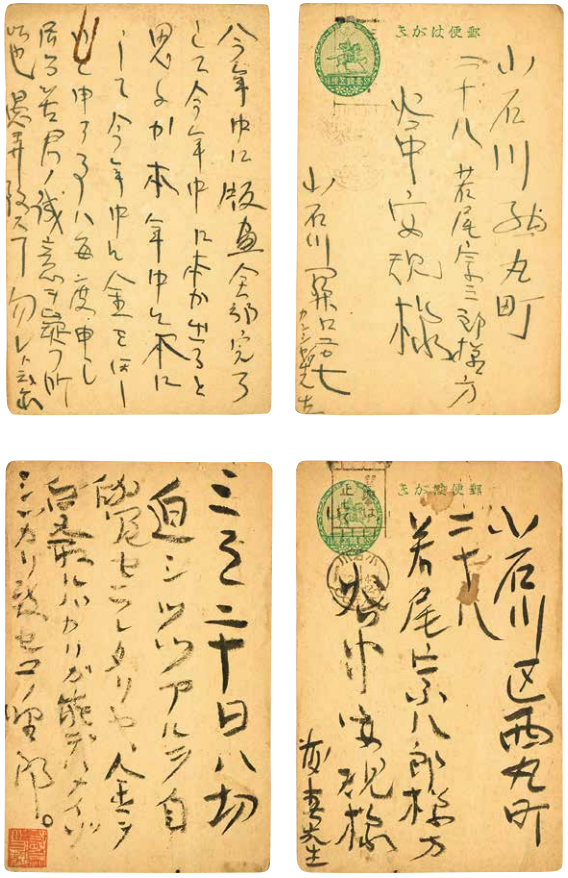


表紙

口絵



装画



**谷中安規**
**《『FOU』のための装画(別刷り)》**
**1936年頃　木版、紙**
**19.8 × 27.4 cm(シート)　当館蔵**

**佐藤春夫「谷中安規宛葉書」**
**[1935]年12月9日付　個人蔵**

—

今年中に版画全部完了して今年中に本か出ると思うか　本年中に本にして今年中に金をほしいと申す事ハ毎度申し居る筈君ノ誠意ヲ疑フ所以也愚弄致ス事勿レト云爾*

(表)小石川西丸町二十八／若尾宗三郎様方　谷中安規様／小石川関口二〇七　カンシヤク先生

(消印)小石川　[10]・12・9

＊云爾＝しかいう。文末に用いて、これにほかならない、といった意味を示す。

**佐藤春夫「谷中安規宛葉書」**
**1936年2月14日付　個人蔵**

—

三月二十日ハ切迫シツツアルヲ自覚セラレタリヤ金ヲ受取ルバカリガ能デハナイゾシツカリ致セコノ野郎。白文方印「佐藤春夫所印」

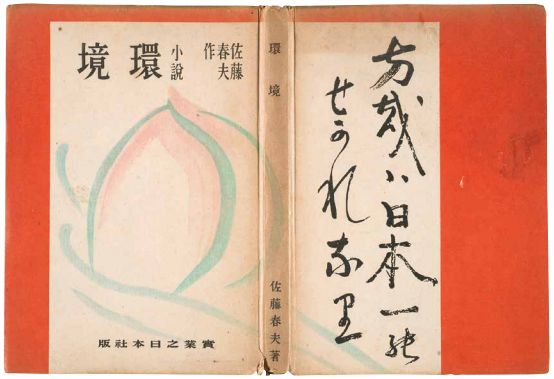
(表)小石川区西丸町二十八／若尾宗八郎様方　谷中安規様／藤春先生

(消印)小石川　11・2・14

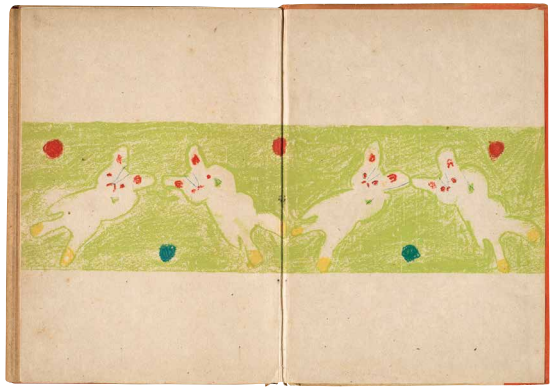
## 『環境』をめぐって

紆余曲折を経て結婚した妻千代との間に長男方哉（まさや）が生まれたのは、1932年10月、春夫が40歳の年であった。愛息の成長を描き、「一種の親馬鹿小説」と自称する『環境』は、連載に手を加えて単行本化された。親馬鹿ぶりは造本にも発揮され、「方哉ハ日本一のせがれなり」と記した自作の桃の絵を表紙に回し、見返しには息子の描いた、谷中の言う「うさうさうさぎの画」を差し込んでいる。親子の共作に参加できたのが、方哉のお気に入りでもあった谷中であった。扉絵、挿画を谷中は手がけ、家族のなかに迎えられたようで嬉しいと、方哉宛の手紙で伝えている。

カバー




表紙

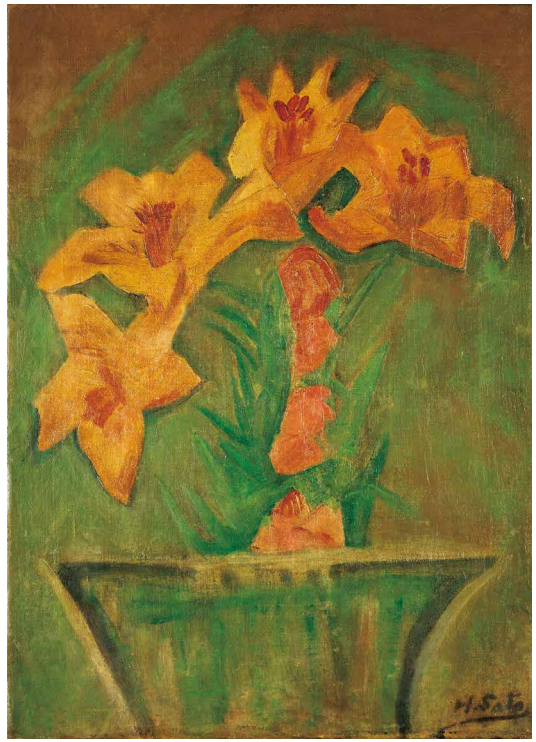


見返し

口絵：谷中安規

佐藤春夫『環境』（實業之日本社、1943年）
書籍　20.5 × 15.1 cm　個人蔵

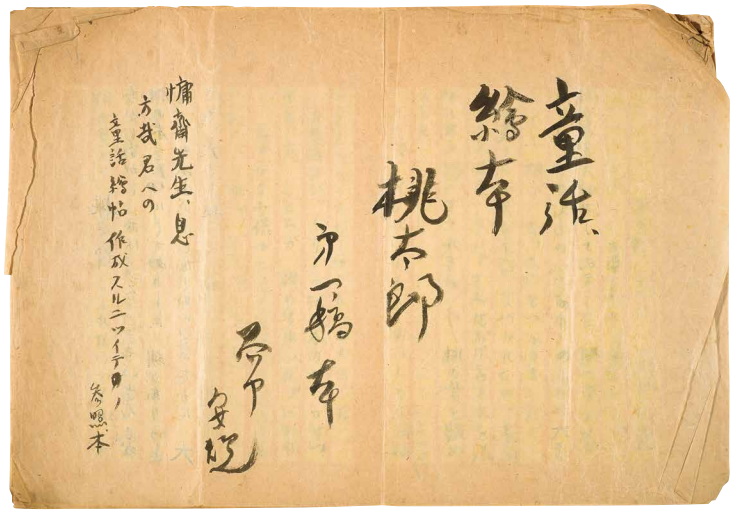
佐藤春夫《谷中安規像》
1942年　油彩、キャンバス
52.0 × 45.0 cm　個人蔵

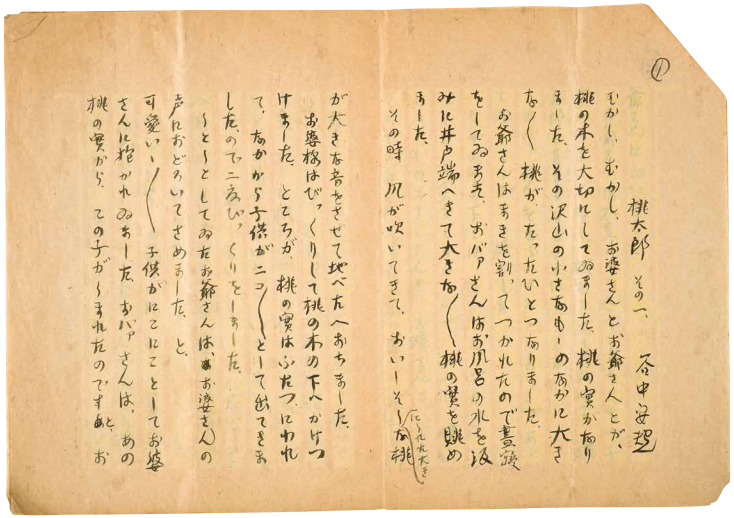


佐藤春夫［百合の花とスイトピー］
1942年頃　油彩、キャンバス
41.4 × 30.0 cm　個人蔵

—

どちらも谷中の関係者の元に伝わった作品。1942年8月4日付で谷中が方哉に送った書簡には、春夫が『環境』の表紙に使いたいとして、「百合の花とスイトピーの油絵」を谷中に渡したことが記される。描かれた花が合致することからも、下の作品がその絵に該当すると考えられる。結局表紙は春夫の桃の絵になり、本作は使われていない。



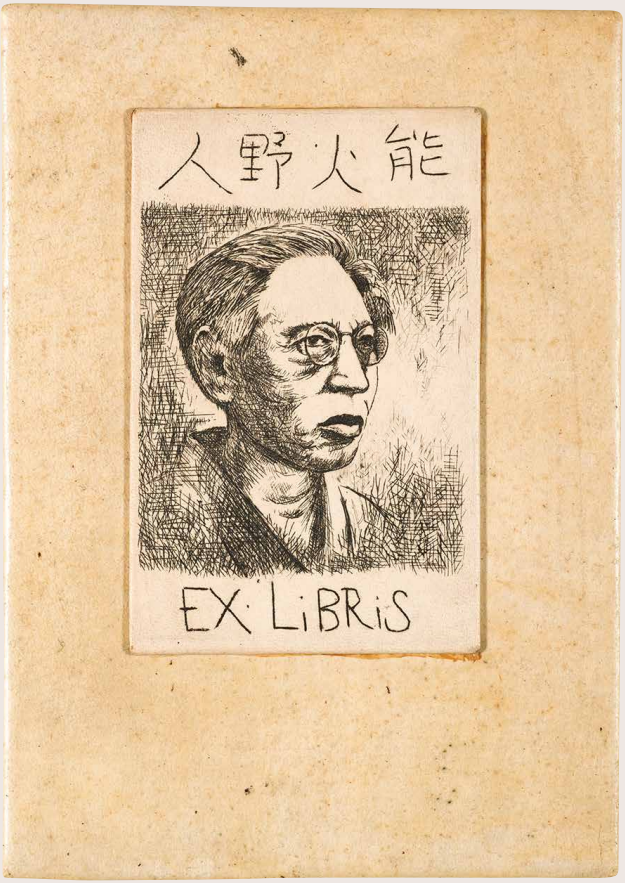




◆谷中安規《童話絵本桃太郎 第一稿本》
制作年不詳　墨、紙（11枚綴り）
27.0 × 39.0 cm　当館蔵

11枚綴りのなかに、いわゆる「桃太郎」の話に基づく物語が、「その一」「その二」と二つの章に分けて記される。「その一」では、まず桃太郎が桃から誕生し、おじいさんとおばあさんがそれを喜んでいる間に、犬、猿、雉が桃を勝手に食べてしまう。気づいたおばあさんはたしなめるが、すぐに許して桃太郎を仲間に入れてと紹介する場面で終わる。「その二」では、成長した桃太郎が巨大な鬼の退治に向かい、犬、猿、雉と協力してそれを成し遂げる。角を折られ人間の大きさに縮んだ鬼は反省し、桃太郎、おじいさん、おばあさん、犬、猿、雉と一緒に平和に暮らすことになる。表紙左上には、「慵斎先生、息 方哉君への童話絵帖作成スルニツイテノ参照本」との書き込みがある。慵斎先生とは春夫のこと。なんらか共同制作の話が持ち上がっていたのかもしれないが、実現はしなかったようだ。

谷中安規《ドラゴンズドリーム》
1939年頃　木版、紙
21.8 × 28.2 ／ 25.1 × 33.4 cm　当館蔵
—
新宮の文化人であり、版画家としても活動を行った杉本義夫から、春夫の旧蔵品として寄贈を受けた谷中の版画4点のひとつ。杉本が春夫から直接譲り受けたと伝わる。第8回日本版画協会展に出品された「龍の夢」に該当する。本作にはイメージの左側、本紙の余白に「安規」のサインと印があり、春夫に渡されたことからも、特別な1枚であることが想像される。

◆谷中安規［女性像］
制作年不詳　水彩、金彩、紙
23.6 × 13.8 cm　当館蔵
—
紙裏に「谷中安規」と記され、本紙が貼り付けられた台紙には、「a.k. Jw. 3/24/20」と読める書き込みがある。




「佐藤春夫の美術愛」展パンフレット
編集・文：宮本久宣（和歌山県立近代美術館）
デザイン：鈴木大義
撮影：長岡浩司
印刷：中和印刷紙器株式会社
発行：和歌山県立近代美術館
発行日：2025年4月12日
©2025, The Museum of Modern Art, Wakayama

和歌山県立近代美術館
THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA